

広島60年ぶり 希望の旋律

広島原爆投下を題材にフィンランドの音楽家によって作曲され、1955年、指揮者・朝比奈隆(1908~2001年)が広島市内で国内初演を実現させた交響曲「HIROSHIMA」が今年11、12月、国内で60年ぶりに再演される。戦後70年の節目、平和を願うシンフォニーが再び響く。

戦後70年



作曲家はエルツキ・アールトネン(1910~90年)の肖像。ピアノ奏者として活動する傍ら作曲も行った。HIROSHIMAは49年に完成、ヘルシンキで世界初演。来日したことはないが「ヒロシマの悲劇が起こった時、既に私はこの交響曲の作曲を決心し

ていた。全人類がこの不幸を嘆き、その憤りは絶頂に達した」と、プログラムに書いた。7部構成で、演奏時間は約30分。暗い旋律が始まり、「火の爆風」と名付けられた後半部では爆発を連想させる大音量が鳴り響き、犠牲者を弔う葬送行進曲風のリズムが続く。フィナーレは一転、明るい音色で希望を表現する。朝比奈は53年、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団に客演。楽団員だったアールトネンから総譜を手渡され、平和の祈りを込めて、焦土から

朝比奈隆日本初演 交響曲再演へ

立ち上がる広島の姿をイメージして作曲しました。私がなし得る唯一のプレゼントです」と、広島での演奏を熱望された。その様子について朝比奈は「心を打つものがあった」と日本への手紙に記した。

終戦から10年後の55年8月15日、朝比奈は関西交響楽団(現・大阪フィルハーモニー交響楽団)を率いて広島市公会堂でこの交響曲を取り上げた。広島出身の関西財界人の援助で無料公演となり、昼夜2回で計約5000人が来

場。同月末、京都市でも演奏されたが、その後、楽譜の存在は忘れられていった。

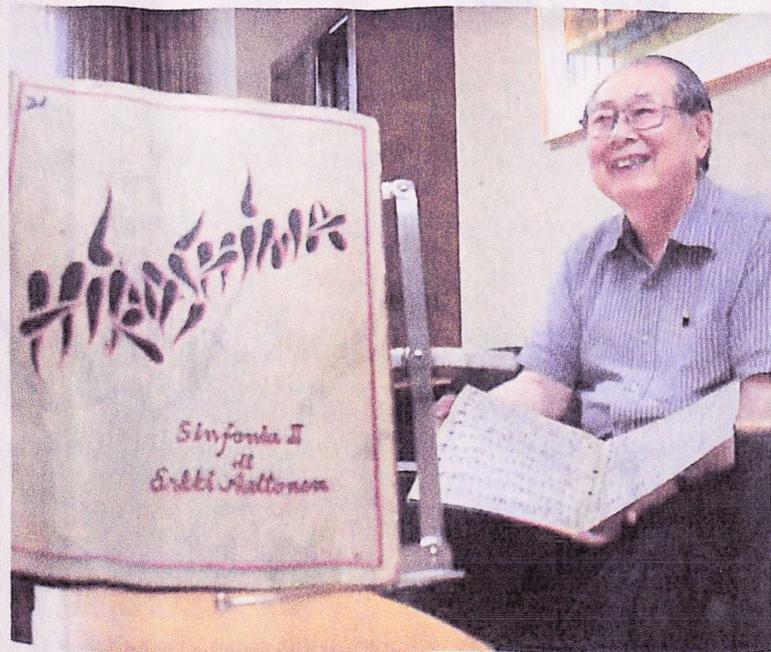


作品を掘り起こしたのは、原爆をテーマとする曲を調査して

きた市民団体「ヒロシマと音楽」委員会の能登原由美さん(44)の肖像だ。「曲の散逸を防いで若い世代に引き継ぐため、個別の作品を詳しく調べたいと思った」と語る。アールトネンについては2008年から本格的に調べ、

大阪市の大阪フィルに総譜が保管されていることを確認した。フィンランドの遺族を訪ね、日本の聴衆からアールトネンに「被爆当時を思い出して心の中で泣きました」などと、感謝の手紙が届いていたことも分かった。

能登原さんは「おそろくヒロシマを題材にした最初の交響曲で、最初の外国人作品。アールトネンは第2次大戦に従軍経験があり、心と街の復興を願って曲を作ったのでしよう」と話す。



古い楽譜の中から出てきた交響曲「HIROSHIMA」総譜。小野寺さん(右)が能登原さんに存在を教えた(大阪市西区の大阪フィルハーモニー交響楽団で)＝野本裕人撮影

能登原さんや、大阪フィル顧問・小野寺昭爾さん(80)らの呼びかけが、再演への原動力になった。広島交響楽団が11月16日、広島市のJMSアステールプラザ大ホールで披露。大阪フィルが12月5日に兵庫県西宮市の県立芸術文化センター、同6日に広島県三原市の市芸術文化センター、ポポロで演奏する。大阪フィルの首席指揮者、井上道義さん(68)は「戦後10年で、朝比奈さんは『何かをしなければ』という気持ちで、この曲を広島で初演した。観客と社会、自分たちのために演奏する」と決意を語っている。